
廃墟の記憶

紫苑丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廃墟の記憶

【著者名】

Z0465BA

【作者名】

紫苑丸

【あらすじ】

あらすじとかを書くのは苦手なので、『アホください』。
書いたほうがわからなくなってしまいます。

青く澄んだ空が見える。草原の縁が心地いい丘の上を、さあつと背の低い葉を揺らしながら、そよ風が吹いた。ふんわりとカーブを描いている丘の頂上。その場所に私はいる。

懐かしい。あの田も、こんなように晴れた日だった。たしかあそこに、あの子のお気に入りの場所があった。そこにはブランコがあつて、一時期は止めなければずっと乗っていた。妹の方のお気に入りは向こうだつた。今はもう無いけど、お花畠だつた場所。でも、その隣に沢山あつた白詰草は今でも残つてゐる。お花畠では、花を編んで色々なものを作つていた。少し飽きたと隣に移動して、四つ葉を探してた。花で作つたものが完成したり、四つ葉のクローバーを見つけたりしたら、まっさきに兄にプレゼントしていた。兄は少しだけ恥ずかしそうな顔をして、それでもちゃんと受け取つてくれた。

そうこうしていると、そのうちに母親が帰つてくる。すると、二人は飛び付いて、そうして、一人して母親を抱き締めるのだ。

この家庭には父親がいなかつた。事情はわからなかつた。亡くなつたのか、どこか遠いところに行つてゐるのか、それとも、この三人を置いて、誰か他の人と逃げたのか。考へても仕方がないことだつた。とにかく、私が最初見たときから、この親子は三人だつた。

でも、この家庭はとても暖かかつた。子供をしかるべきも優しくであつたし、子供もしかられるようなことはほとんどしなかつた。互いに支えあい、助け合つていた。

平穏に毎日が過ぎていった。子供たちは、晴れている日には外で元気に遊び、雨の日には家の掃除をしたりと手伝いもしていた。母親が毎日どこに行つてゐるのかはわからなかつたが、きっと仕事だろうと思つた。子供二人を、女手一つで育てるのは大変なのだろう。

でも、幸せそうだった。パンを持って、家に帰つてくる。美味しいね、とちゃんと三等分された、実は母親のパンが少しだけ少ないのだが、それに気づかず少し大きめのパンを子供たちが食べる。その美味しそうに食べてる顔を見つめている顔が、一番、幸せそうだった。それだけで、私も幸せだった。

ある日、母親の帰りが遅い日があった。その日は雨が降つていた。さつきまではおとなしく待つっていた子供たちも、今は心配そうにしている。

「ねえ……。お母さん、遅いね……。」

妹が兄に心配そうに聞いた。

「大丈夫だよ。雨が降つてから少し遅くなつてるだけだよ

そうは言つたものの声には不安がにじみ出でていた。

もし、母親が帰つてこなかつたら、この子たちはどうなるのだろうか。そんな思いが脳裏をよぎった。

「私、行つてくる」

「おい、待てよ。行つてどうするんだ。お母さんがいつもどこを通るのかわかってるのか？」

「でも……でもっ！」

「僕たちが巻き込まれたらどうするんだ！一番悲しむのはお母さんじゃないか！」

「じゃあ、お兄ちゃんは心配じゃないの！？あそこは一度崖崩れがあきてる危ないとこなのに、お母さんはあそこを通るのに…」

「もちろん心配だよ！だから僕たちだって危険じゃないか！お母さんは自分より僕たちの方が心配なんだ！それなのに僕たちが行つてどうするんだ！」

その言葉で妹がうつむいた。

……どうやら、子供心にもわかるらしい。今がどれほど危険なのか。そして、人の悲しみと、幸福とが。

きっと、いや、もしかしたらだけど、父親に関係してるのである。でも、私は結局知ることができなかつた。私は当たり前の存

在だったから、話されることがなかつた。けれど、それでよかつた。それが当たり前だから。

「でも、ここで待つてるだけなんて、耐えられない……。……ねえ、

ドアのそとまではいいよね?」

「……そうだな。そこまでなら大丈夫だな。待つてろ。お兄ちゃんも行く」

やっぱり、兄も心配で仕方なかつたようだ。一人で外に出て、傘をさしながら手を握りあつて、じつと待つていた。

三分ぐらいだつたと思う。でも、本人たちにはどれほど長く感じられたかわからぬ。

そして、帰つてきた。どちらも、相手を見ると泣きそうになつていた。

いつも通り二人は抱きついた。違うのは濡れていることと、普段より長く抱き合つていてことだつた。

印象深い雨の日はこれつきりだつた。

それから、何十年と時が過ぎた。一人は大人になり、新たな家庭を持つた。妹は嫁いでいつたが、兄は残つた。そして、連れられない日がやつてきた。

母親が亡くなつた。

まだ若かつた。けれど、流行り病に勝てなかつた。彼女の体は、もう、疲れていた。

慎ましい葬儀が行われた。その日は妹も帰つてきて、哀しんでいた。二人を愛し、慈しみ、育ててきた人はもう、いなくなつてしまつたのだ。

明確に悲しみというものを感じた。もちろん今まで知つていた。でも、違つていた。悲しみがわかつていただけで、感じたことはなかつたのだ。長く共に年月を過ごしてただけなのに、どうして、こんなにも悲しいのだろう。私にはわからなかつたし、これらもわからないのだと思つ。

兄は母の思い出から逃げるよう出ていった。妹は帰つていつた。二人の姿を見ることはもう無かつた。

残されてから長かつた。もつこのままになつてしまふのかと思つた。でも、温もりも忘れそうになつた頃、出会いがあつた。

一人の人間。男の人だつた。その人がやつてきた。服装は長袖のワイシャツに太いベルトで締めた黒い色のズボン。その上に大分くたびれた感じのコートを着ていた。

初めて見たとき、今までに感じたことの無いようなものを感じた。不思議な気分だつたけど、きっと調子でも悪いのだろうと思った。

その人は置いてあつた椅子に座つた。よく、母親が座つていた椅子だつた。疲れたようにコートを脱ぎ、椅子に掛けた。何故かさつきは氣づかなかつた鞄から写真立てを取り出した。

その写真には三人の人が写つていた。けれどもうひとつ写真を取り出したので、そつちの方に興味が移つた。二人しか写つていなかつた。でも、そつちの方が大切らしく、さつきよりも心なしか慎重に置いた気がした。

その人が立ち上がつたので、写真は後回しにした。すると、まだ空は明るいというのに寝室に向かつた。いや、考えてみるとどこに何があるかなんてわからないのだから、ただの散策だらうと思いつ直した。しかし、ベットを見つけるやいなや歩み寄つて、倒れ込んだ。……どうやら運はいいようだ。

眠つてしまつて手持ちぶさたになつたので、写真を見るにした。

まず三人写つてる方を見る。後ろには森が見える。木漏れ日の中、みんな手を繋いでいる。おそらく彼と同一人物だと思われる少年が写つている。その隣には男性と女性が並んで立つていて。おそらく両親だらう。三人ともにこやかで幸せそうだ。あの三人を思い出した。……あの三人だつて、幸せだつたに違ひない。あの日までは、きつと。

隣に注意を逸らす。一人写っている写真だ。

後ろはおそらく家だ。ゴシック調の立派な家。もしかしたら觀光名所か何かかもしれないけれど、写っている範囲だけではよくわからない。さつきよりも成長した彼と一人の女性が写っている。また、感じたことの無い感情が沸き上がった。それも、さつきとは決定的に違う感情だった。

疲れているんだ。早く休もう。そう思って休もうとしたが、なかなか休めなかつた。

次の朝。いつのまにか彼は庭にいた。どうやら早起きな性格のようだ。何だか彼のことを知りたいみたいだと思った。まあ、きっと気のせいだろう。

彼は体操をしているようだ。ずいぶんと健康的だ。

体操が終わつた後、彼は中に入つて朝食をとつた。鞄から携帯食料のようなものを取り出して、あまり美味しいではない様子で食べた。

その後、椅子に座つて写真を眺めた。なにか特別な感情があるようには見えなかつたが、目を逸らすことはなかつた。

太陽が真上に上つたころ、彼はやつと椅子から立ち上がつた。すると、また鞄から同じものを取り出して食べた。そして、また椅子に座つた。彼は革の剥げてきた椅子に座りながら、特別造形の凝らされていなない写真立てを眺めていた。夜までそのままだつた。

夜も更けてきて明かりが必要になる頃、彼は寝室に向かつた。私は彼のことが不思議だつた。どこから来たのかとか、何故ここに来たのかとか、ここで何がしたいのかとか。手掛かりになるような物といえば、写真ぐらいだつた。でも、それだけでは何もわからなかつた。

また次の朝。彼は昨日と同じことをした後、どこかに出掛けいつた。また残されてしまうのかとも思ったが、写真立てが置かれていたのでそれはないだろうと思つた。

ふと、誰も近くにいないことを実感した。ちょっと前までは、

長い間そうだったから、それが当たり前な気もした。でも、今はもうそうは思えない。独りでいる時間も嫌いではないが、少し長すぎた。木に鳥がとまり、歌を唄う。それを静かに聞いているのも好きだ。時折吹く風を浴びるのも好きだ。毎日はやめてほしいが、雨に濡れるのも嫌いでは無い。

でも、さすがに寂しくなった。

彼は帰つてくるとは思つたが、やはり少し不安だった。それだけではないような気もしたが、私には言葉にすることは難しかつた。

3

その後、太陽が昇つて、傾いて、沈んでも、彼は帰つて来なかつた。

私は、また残されてしまうのが怖かつた。いつそ、彼に出会わなければ、こんな気持ちになることなど無かつたのだろうか。出会わなかつた方が良かつたのか。今からならば、忘れるのも遅くないだろうか。

多分、考へても仕方の無いことなので考へないことにした。でも、何故か考えずにはいられなかつた。私はそのまま、よくわからぬい気持ちのまま、彼を待つた。

それから、太陽が一回上を通過した後の日に、ようやく彼は戻つてきた。嬉しかつた。

彼は袋を持っていた。中はなんだろうと思つたが、すぐにわかつた。彼は中からパンを取り出した。どうやら、食べ物を手に入れに行つていたようだ。彼はおそらくまだ焼きたてなのであろうパンを頬張つた。今回は美味しいそうに食べていた。その後、やはり椅子に座つて写真を眺めていた。

彼にとつて、その写真はどのような物なのだろうか。私は気になつた。その一つの写真をもう一度見てみる。家族と写つている写真。関係性はわからない女性と写つている写真。

私には、彼がそこまで執着する理由がわからなかつた。彼はずっと眺めている。……いや、確かに彼は眺めている。でも、見てい

るという感じがしない。何か、遠くを見ているような、そんな気がする。私は、彼の心は写真では無く、どこか別なところにあるのだと気付いた。

でも、それがわかつたところで、私には、何もすることができない。

時計の針が回つて、時間が流れた。いや、それとも、時間が流れながら、時計の針が回るのだろうか。何故か、急にそんなことが気になつた。そんなことはどうでもいいようにも、どうでもよくないようにも思えた。一体、どちらが先なのか。私が、何も出来ないのか。何も出来ないのが、私なのか。そんなはずはない。きっと、私が、何も出来ないだけなのだ。

彼は、寝室に向かつた。私は、まだ考えていた。

彼は何故、ここに来たのだろうか。前にも思つたことを思い直した。いつもしているようなことをするだけなら、わざわざ私のところに来る必要はないはずだ。ということはここに来たかったのは無く、何らかの理由で、もといた場所にいられなくなつたのではないか。じゃあ、一体その理由は何なのか。それはわからなかつた。私はわからぬことが、世の中には沢山あつた。

結局、朝になるまでずっと考えていた。

そして、今日は一人の来訪者があつた。

4

朝というには遅く、昼というには少し早い、そんな時間だった。彼は相も変わらず写真を眺めていた。

その時、突然、ドアが叩かれた。私は驚いたが、彼は落ち着き払つてドアに向かつた。でも、向かつただけで開けようとはしなかつた。またもドアが叩かれた。今度は先程よりも強かつた。そこで彼はようやく観念したようにドアを開けた。

「久しぶりだね」

「ええ、ほんとに」

そこにいたのは、写真に写つっていた女性だつた。

「で、何故ここに来た?」

「本当にわからないの?」

「いや、そんなことはないただ、おそらく間違えているのだろうけどね」

「いいえ、当たっているわ。私は、あなたに会うためにここまで来たのよ」

「『苦労なことだ』

「とぼけないで!……ねえ、何で帰つて来なかつたの?私のこと嫌いになつたの?」

「……違う。むしろ、好きだつた」

「じゃあなおさら何でなの?」

……わからなかつた。私は、自分の気持ちが、わからなかつた。どこかが、痛いような気がした。心という場所なかも知れなかつた。でも、心なんて、本当に有るのだろうか。こんな私に。もしかしたら、愛を求めているのだろうか。この、私が?

「簡単だ。自分は君には釣り合わない。かたや良家のお嬢様。そして一方は人殺し。いや、もはや殺人鬼か」

彼は自嘲気味に言つた。

「こんな二人が不釣り合いじゃないと言つのか?」

彼女は強い口調で言つた。

「ええそうよ!だつてあなたは殺人鬼なんかじゃないもの!」

「そう言つてくれるるのは嬉しい。でも、これは事実だ。戦争とはいえ、何人もの人を殺してきた」

その言葉に、彼女は少し勢いを削がれたようだつた。でも、口調は変えずに言葉を紡いだ。

「でも、あなたは他の人たちとは違つて、絶対に戦争に関係ない民間人には手を出さなかつた!」

「しかし、隣で人殺しが行われているのに、それを止められないでいた。それは自分が殺しているのと同じだ」

彼女の口調はだんだんと弱いものになつていった。

「そ、それは……きっと、違う。止めたら、自分が殺されるのに、普通はそんなことはできないよ……」

「それに、相手が兵士だろうが、あの戦争でもっとも人を殺したのは僕だ。それなのに、僕は、戦争を終結させた英雄にはなり得なかつた

「……あんなのはただの運よ」

「あの時は、自分の国が正しいと思つてた。敵を沢山殺し、戦争に勝つことで世界が幸せになると思つてた。……でも、そんなのは、ただの絵空事だった。戦争を終わらせることが、一番だつたんだ」

「……あなたは、戦争を終わらせようと頑張つていたんでしょ？ なら、あなたは間違えていなかつたじゃないの？」

「個人がどう思つてたなんてのは、戦争では全く考慮されない。結果が全てだ。そして、結果、僕は間違つていた。それだけだ」

それから、二人はしばらく黙つていた。

彼の過去が、少しだけわかつたような気がした。けれど、本当に少しだつた。こんな少しわかつたところで、何も変わらないのだ。でも、私は、何を変えたいのだろうか。彼のことを知つて、どうしようというのだろうか。私には結局、何も出来ないのではないか？ ジャあ、何がしたいのだろうか？

「……ねえ、やっぱり、帰つてこないの？」

彼女が口を開いた。

「ああ、そのつもりだ」

「なら、私はどうすればいいの？ あなたもいないのに、生きていけつていうの？」

「……それなら、殺してあげようか？」

「あなたに出来るの？」

「僕は殺人鬼だよ」

「嘘よ」

「ああ、嘘だ。僕には、君は殺せない。自分すらも殺せない」

「なら、どうするの？」

今の彼女は、微笑みを浮かべていた。だが、悲しげに。

「あ、どうしようね」

彼も同じだった。

「僕は、本当は君に会いたかった。でも、自分から会いに行くのは、許されないことだった」

「なぜ？ 会こたかったのなら、そうすればよかつたのに」

「さつきも言った通り、僕は殺人鬼扱いだった。そんな僕が、君に会いになんか行つたらどうなると思うんだ？」

「それはそうだけど、こっそり会いに来るとか……」

「そんなことが出来ないのは、君もよくわかつてゐるだらうへ。」

「……」

彼女は黙りこんだ。

私は、もはやなにも考えていなかつた。いや、考えられなかつた。なぜかも、考えられなかつた。

「……じゃあ、私と逃げよう？」

彼は少し考えてから答えた。

「そんなことが、本当に出来ると？」

「何で出来ないの？」

彼女は即座に言つた。

「……そうだな。ここに居ようと思まこと、変わらないな」

「やうよ。さあ、行きましょう？」

そう言って彼女は手を差し出した。

「……君は、本当にそれでいいのか？」

「勿論よ。そうじやなかつたら、こゝまで来ると想つて？」

彼は笑つた。

「ああ、愚問だつたな」

彼は彼女の手を取つた。しかし、すぐに手をほどき、慌てて、それならば荷物をとつてこなくてはいけないと言つた。そして彼はそのまま荷物を取りに行つた。

彼女はいつもことばに慣れているのだろう、微笑みすら浮かべていた。

彼の方は、というと、中で荷物をまとめていた。もつとも、持つていた鞄に入るぐらいの荷物しか無いのだが。写真立てと、何日分かの着替えぐらいだった。食べ物はすでにないから、少し余裕があるはずだった。それでも、彼は手間取っていた。

ようやく荷物をまとめ終え、彼は彼女のものに向かつた。私は、なぜか見ていられなかつた。さつきも感じた、痛みのようなものがあつた。それがなんなのか、わからなかつたし、わかりたくもない気がした。それがなぜなのかもわからなかつた。

もし、人間なら、このようなとき、どうするのだろうか。泣いたりするのだろうか。私には、わかるはずがなかつた。私は、人間の近くにいた。生活の一部だつた。それでも、理解するなど、到底不可能だつた。

気付くと、二人はすでにいなかつた。私は、これでよかつたような気も、よくなかつた気もした。でも、結局私には何も出来るはずがないのだから、どちらでもよかつたのだろう。そして、一人が、最後に出会つた人間だつた。

5

青く澄んだ空が見える。草原の縁が心地いい丘の上を、さあつと背の低い葉を揺らしながら、そよ風が吹いた。ふんわりとカーブを描いている丘の頂上。その場所に私はいる。

私はすでに、廃墟になっていた。屋根は崩れ、壁はとじれど、ろ壊れ、窓にはもうすでに何も無い。

それでも、私にはまだ意識があつた。一体いつ頃、私はいなくななるのだろうか。もう誰にも、いや、何にも必要とされなくなつたらどううか。

鳥の鳴き声が聞こえた。そして巣に戻ってきた。布が破れ、綿がはみ出している椅子に巣がある。そこには、唯一壁と屋根が残つてゐるところだ。

それにしても、彼はどうなったのだろうか。私は、まだ気がかりだった。どこに行つて、何をしているのだろうか。こんなにも気になる理由はわからなかつた。人間にはわかるのかもしれないが、私にはわからない。

鳥が飛び立つていつた。やっぱり、生命の温もりはいいものだと思う。もう、人間を見なくなつてずいぶんと長いけれど、また、住んでくれる人がいるといいなと思った。

(後書き)

後書きなんて書ける身分では御座いませんが、読んでいただければ幸いです。

恥ずかしながら、今回の作品は完全にのりで完成いたしました。
ですが、設定は意外と考えたので、また書いていきたいとおもいます。

では、これ以上は見苦しいと思しますので、終わりにさせたいただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0465ba/>

廃墟の記憶

2011年12月31日23時50分発行